
夕闇威王伝記

Jessamine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕闇威王伝記

【Nコード】

N3969BA

【作者名】

Jessamine

【あらすじ】

彼女の人生はいつも半端だった。

まるでこの世界が自分の居場所ではないような…時々そんなことを感じていた。

だが、それは本当だった。

本当の彼女、そして彼女が存在するべき真の世界とは……？

【彼女】

彼女は、海の向こうに沈んでゆく橙色を見つめている。

消えてゆく太陽に向かって何羽もの海鳥が飛んでゆき、波は沖から途絶えることなくこちらへ揺られてくる。

ふと風の向きが逆方向に変わった。

風がふわりと、彼女のゆるやかなウェーブの髪を揺らす。

偶然にも、その方向にはあれがあり、初めてそこに連れて来られた時のことを思い出して彼女は静かに微笑んだ。

夕焼けは彼女の色、彼女の香り、彼女の体。

昼でもなく夜でもない、その間に存在する夕闇。

極端なことなど何も無い、中途半端な彼女。

全てはまさにそんな風だった。

あの時まで。

あの風のように、運命が簡単に逆方向に吹き始めるまでは。

その日も、いつもと同じような五月の朝の始まりだった。

違うことといえば、晴天がずっと続いていたのに、今日は段々と雲行きが怪しくなるでしょう、という天気予報が流れた事くらい。

霧谷茜はその日、念のために折りたたみ傘を持って学校へ向かった。

『おはよーあかねー』

『あ、おはよ』

『ねえ、今日は天気崩れるかもだってね？珍しいねえ、この頃ずっと普通だったのにさ』

登校中に話しかけてきたのは、今のところ一番仲の良い友達、川原静香だった。

今のところ、というのは、茜は人との関係がとても中立的だからだ。

あのグループに入っているわけでもなく、こっちのグループと行動しているわけでもない、どの友達とも同じような距離感を持った立場を、茜は保っている。

静香はその中でも、まあまあ他の人よりも仲が良い方である。

昔から何故か、茜はそのような関係ばかりを無意識に築いてきた。

友達だけでなく、家族の中でもそうだ。

父親の样でも母親の样でもない容姿と性格。

どう鼻肩して考えたって、二人に似ている所が、それどころか親戚に似ている所さえひとつもない。

浮いた存在の彼女は、同居している父方の祖父母に、何か起こるとすぐ茜のせいと決めつけられ、両親の良い所ばかり取って産まれてきた一つ年下の妹にはよく馬鹿にされてきた。

まったく、いつも問題を起こすのは茜なんだから。なんで優子のよ
うに出来ないの？見習いなさい。

おねえちゃんてさ、ホントは捨て子だったんじゃないの？

唯一の味方と思われる両親も、共働きのために夜遅くまで帰って来ない。

妹の言う事を真に受けているわけではないが、時々ふとそのように考えたりすることもある。

もつと遠い彼方に、自分の居るべき所があるのではないかと。

そして、いや、そんなこと有り得ない、と思い直す。

そんな時、茜はよく夕焼けを眺める。

いや、それだけでなく、困った時や疲れた時、落ち込んでいる時にも見たくなる。

昼のように明るくもないが、夜のように暗過ぎることもない、その間の夕闇。

時間的にも遅くもなく早くもなく中途半端だ。

それでも夕焼けの橙色はとても綺麗な彩りをしている。心を暖かくさせてくれる彩り。

何だか見ているだけで落ち着いてくるのだ。その美しさに感動するのではなく、心が静まる。

『そうだね、曇ったりしないといいね』

見えなくなるかもしれないから

と茜は心の中で付け足し、静香には困ったように笑いながら応え、着いた学校の正門をくぐり抜けた。

下駄箱を通り過ぎ、静香と茜はそれぞれの教室に向かった。

『おはよー』

『おはよ、高橋さん』

『あのさ、昨日の七時の日テレって見てた？』

席に着くと、茜の前の席の辺りに集まっていた女子たちの中の一人が話しかけてきた。

『七時…うーん、多分その時は多分宿題してたかも』

『そっかあ、残念』

あっさりとその子は会話を終わらせ、視線を茜から外した。

その時…

ガラスとドアが開き、また一人入ってきた。

『あ…』

茜と話していた子は戻しかけた視線を新しく入ってきた子に定め、嘲笑うようにクスリとした。

『なんだ、華じゃん』

途端に、高橋さんの周りの子達がクスクスと笑い出した。

『ちよつとみーちゃん、そんなの言っちゃ可哀想だよ』

『なに、あたしただ「華じゃん」って言っただけだし』

『あ、そっかあ』

囁くというには不自然に大きめな声で、あたかも誰かに聞かせるように話す。

華、と呼ばれた女子はチラッとこちらを見てから、俯きながら自分の席に座りにいった。

女子達はまだコシヨコシヨと小さく囁きながら喋り、時々華の方を向いて嘲笑している。

またこれか…と茜は特に何もせず、ただ自分の教科書を読んで予習していた。

しばらくすると、教科書に影が差したので上を向くと、森田華がいた。

『あの…霧谷さん…おはよう』

と、茜の机の前に来て弱々しく微笑みながら挨拶してきた。

少し驚いたが

『おはよ』

と返すと、また華が弱々しく言った。

『あの…霧谷さんていつも宿題とか必ずしてきて偉いよね』

『……そうかな。でもやらなかったら成績落ちるの分かってるから。

』

『うん、そうだね…。』

そこで会話が止まってしまった。

沈黙がしばし流れたが、やがて華が言いにくそうに聞いてきた。

『あの、さ、昨日の古文のあれ…やった？　うち忘れちゃって…写させてくれない？』

なんだそんなこと。

ノートくらい、そこまでおどおどしなくても普通に聞けば良いのに。

だが、ノートを机から取り出そうとすると、

『茜、ノート貸してあげるのお？』

と高橋さんが話しかけてきた。

『てゆか茜ってキレイ好きだったよね。だったら華なんかに貸すのやめなってえ』

鼻につくような嫌味たっぷりの声で止めてきた。周りがキャハハッと笑い声を上げる。

チラッと茜が華を見ると、泣きそうな顔をして彼女は席に戻ってしまった。

今回は、ふう…と溜息が出た。

『まさかき、茜ってお人好し？華なんかに優しくする必要なんて全然無いからね、マジで』

高橋さんは友達とまだクスクス笑っている。

微笑みはしたが返事はせず、茜は席を立って窓の外を見に行った。

外は登校した時よりも曇っており、窓枠に触れると少し冷んやりとしている。

今日は曇っちゃうな

と、思いながら、ホームルームが始まるまで外を見ていた。

待っていても、結局雲行きは変わらなかったが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3969ba/>

夕闇威王伝記

2012年1月13日14時45分発行